

「ねえ、リオ。北ってやっぱり寒い
のよね?」

「ん? そうだね。レイはあれから
北海道に帰っていなかったんだね」

「帰る場所ではなく、行くことなの
い場所だと思っていたの」

「あれから雪を見たことないの?」

「もう何年も……」

「そうなんだ」

「でも、またリオに再会出来るなん
てすごいことよね」

レイとリオは幼なじみだった。二
人は幼い頃近所に住んでいたが、レ
イは大人になり、北海道を去ったが、
雪が降らないこの街で偶然再会し
た。3歳年上のヤンチャで活発だっ
たレイと相変わらず口下手なりオは
それぞれの学生時代をそれぞれの土
地で過ごすことになった。あれから
10年。夏は家族でキャンプに行き、
冬は南国オーストラリア人でにぎわ
っていたスキーの思い出は記憶の断
片にしか残っていなかったはずだっ
た。

「覚えてる? スキー場のこと」

「え? 何だっけ?」

「ニセコのスキー場でオーストラリ
ア人と英語で話したこと」

「あれか……」

「リオだったら、習いたての英語を使
いたくて、どのくらい滞在するの
聞いたたら、あの人、フォート・ナイ

トって答えた。半月の
意味も分からなくて、
顔を真っ赤にして逃げ
たよね」

「そうだったわね。で
も今考えても変な話よ
ね。なぜ真夏のオース
トラリアの人たちがあ
の寒いニセコにスキー
に行きたがるのかし
ら」

「きっと、祖先が寒い
国から来たからかな
あ」

「まさか。そんな、で
も私が北海道にいた時
も、みんな冬になると
暖かい所に行きたがっ
ていたわね」

今は幼稚園児が英語を習う時代に
なったが、その当時、初めてスキー
場で使った英語の興奮はリオには忘
れることができない事件だった。

二人は同じ学校に通って、毎朝決
まってレイがリオを校門で待ってい
るのが日課だった。英語の塾も同じ
で、読み書きが上手なレイと口下手
なのに、英語となるとやたら話した
がるリオ。まるで姉弟みたいにいっ
つも机は隣同士で、塾が終わりに、暗く
なると年下のリオがレイを守るよう
に帰った。

Vol.34 水嶋ヒロは『KAGEROU』 ヒール宮井は『NOUGYOU』



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに粟50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたこと、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

「ねえリオ、今何してる
の?」
「仕事? 農家、いや気取
った言い方だと生産者か
な」
「お父さんの仕事引き継い
でいるんだ。今も農業って
大変なの?」
「楽な仕事はないよ」
「そうよね。みんな一生懸
命頑張っているのよね」
「昔はただ働いていれば、
それでよかったけど、今は
いろいろなことができない

オレにも 言わせる! 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

と農業はできない」

「どうということなの?」

「税務、法律、機械、経営感覚を持った農家は強いよ」

「じゃあ、リオは無理かも」

「え?」

「もちろん冗談よ、だってあの頃からリオは世界一でっかい農場にすんだって言ってたわよね」

「そんなこと、よく覚えていたね」

「でも信じられない、リオが本当に農業やるなんて」

「あの頃から規模拡大がすごい速度で進んでしまつて平均的な面積では生きていけなくなつたんだ」

「やっぱり農業って大変そうね」

「天職とは思わないが、誰かがやらなければ、明日食べる食事はないよ」

「リオ、すごいこと言っている」

「やっと分かった? 農業がすごいのは、物を作る原点であり、一番ありがたいのは家族がいつもいることかな」

リオは同じ世代の若者と同じように自分の将来を悩んだが、多くの若者が農村を離れ都市に向かい、自分とは違う道を進んでいることに明らかに違う自分との葛藤を感じていた。

そして、その答えを出すために自分の親の職業である農業をすることになった。レイはその近年起きた農業の大変化を知らずに話しているが、

それは彼女の一般的な世代の考えとはかけ離れているものではなかった。

「レイは今何しているの?」

「普通の公務員」

「公務員って自衛隊?」

「違つて、本当に普通のOLみたいな公務員だつて」

「レイが公務員か。きつと自衛隊入つて男どもとドンパチやっているかと思つたよ」

「残念でした。リオがやっている農業こそ公務員と同じじゃないの?」

「そうなんだよ。自分では非日常的生産特別国家公務員って言っているけど」

「何それ? もしかして補助金たくさんもらっているってこと?」

「交付金だよ、補助金とは性格が違うんだ」

「ふりん。よく分からないけど、人のためにはなつていけるのよね。ところでリオって、冬には何をしているの?」

「何つて……、いろいろ……」

「だから、いろいろって何よ?」

「尋問されているみたいだよ」

「ごめんさい。だつて久しぶりに会つたから、いろいろ聞きたいのよ」

「いろいろつて?」

「なにそれ? リオの意地悪」

「冬は翌年の準備かな。機械の整備をしたり、勉強もしたり」

「勉強つて、どんな?」

「いろいろあるんだよ」

「あゝまた、いろいろつて言つてる」

「ちやかすなよ。まじめに答えているんだから」

「日本つて進んだ先進国つてみんな信じているけど、日本の農業は科学的、機械的にもまだまだ米国から見習うことが多いんだ」

「え? 農業を米国に見習う?」

リオはレイが言いたいことを分かつていた。なぜ米国なのか。リオには日本の農業の限界を感じるものがあつた。規模拡大が進んだとはいえず、やつと中央ヨーロッパ並みでは、次の世代に引き継ぐ魅力に欠けることを。そんなリオは毎年冬になると知人を頼り、いまだ世界の食糧庫と自負する米国の絶対的な力の源を知る必要があつた。時間のとれる冬は最高の自己啓発のチャンスとなること

は誰でも知つてははずだった。

「レイはヨーロッパが好き?」

「そうね。ブランドがあるし、街もきれいだし。男の人もブランドの車はやつぱりヨーロッパ製よね?」

「僕は違う。だつて今レイが言つたことつてすべて物だよ。ヨーロッパの人々がすごくて立派だつて、どうして言わないのか。おかしと思わないか?」

「リオ、それつてどう言うこと?」

「僕はみんなが強く生きていくべきだと思つた。暖かい国では人を騙しても生きていけても、寒い国で同じことをしたら排除され、路頭に迷うことになる」

「余計分らなくなつてきた」

「あまり難しく考えなくてもいいよ。自分が正しいと信じていけば」

「そんなものなの?」

リオは米国が好きだつた。遠く地平線まで見える広い大地は、いかなる言語も封印させ、世界中の英知が試される実験場の様にさえ見えてくる。そしてリオは感じていた。今の日本人のヨーロッパ志向は米国経由で上書きされた物であることを。

「ねえリオ、やつぱり私のこと好き?」

「えつ?」

「正確に言うると、あの頃、私のこと好きだつたでしょう?」

「うゝん、知らない」

「相変わらずはつきりしないね」

「寒い国の男はこんなもんだよ」

「ばーかみたい。寒さのせいにするなんて」

「でも知つてるよね。寒い国の人は優しいつてこと?」

「私は優しくないかもよ」

「僕といれば、温かくなれるよ」

「そう思う? また帰つてみたいな。寒い雪の降る故郷へ……」